

神田川沿いの文化圏散策

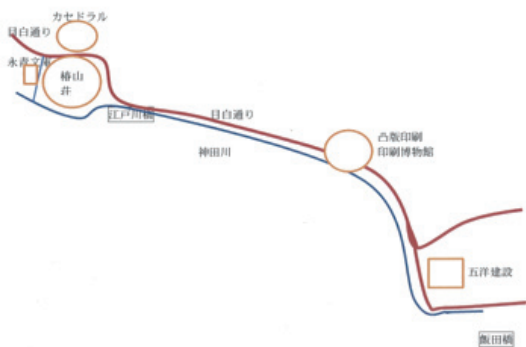
(千葉・市原支部の活動報告)

田中修一

私たちは、千葉市各区で年間を通しての建築相談、市民フェアへの参加のほか、会員・市民共同参加形式の文化講座セミナーや施設見学など、公益社団にふさわしい活動をしています。その一端として今年7月8日に開催した標記の内容をご紹介します。

江戸の貴重な水源として管理されてきた神田上水は、今ではその水質は見る影もないが、江戸川橋から早稲田にかけての沿岸の風情は、都心の中にあっても静寂と安らぎをかもし出す。そこに息づく文化の香りを体で感じようと、真夏の暑さの中にも拘らず、会員と一般市民総勢20名の老若男女が集合した。今回のルートは関口台町のカテドラル⇒永青文庫⇒神田川沿いの江戸川公園を経て大曲の印刷博物館⇒飯田橋の五洋建設本社別館をたどる。

徳川家康の命で施設された神田上水は、井之頭池を起点と



して小石川関口大洗堰に至り、そこから二分して一方は水戸家小石川後楽園、他方はさらに二分して（飯田橋）江戸川、（浅草）神田川と名を変える。これらの水路は武家屋敷を經由したのち町家に分配されていった。その由来が残る江戸川橋から神田川の斜面一帯の関口台町の高台には、ホテルの庭園で名高い椿山荘がある。江戸時代、久留里黒田藩の下屋敷であったものを、明治の元勳山形有朋が買い取って自邸とし「椿山荘」と名付けたことに始まる。その後藤田財

閣の手に移り、藤田興行→藤田観光→フォーシーズンホテルとして現在に至る。格式の高いホテルとして有名。お茶をするにも値段が高くて貧乏なわれわれには敷居が高いので、そこはパスして向いのカテドラルに直行。

カテドラル関口教会

正式名称は「カトリック東京大司教区カテドラル関口教会」という。カテドラルとは司教（または大司教）が座る椅子のこと。この椅子がある教会を司教座聖堂という。日本には16の教区がある。

この聖堂は言わずと知れた丹下健三の設計だ。RC造HPシェル構造で、外装はステンレスエンボス仕上げ。4枚のHPシェルが寄り添う形で聖堂を構成している姿は、シンメトリックな平面と、力強い外観に構造の特徴がみごとに表現されている。柱に寄らない内部の高みは、天上に通じる荘厳さを強調している。打ち放し仕上げの内部壁面と併せて残響時間が長いのが特徴で。ミサはもちろん信者の冠婚葬祭のほか、合唱団の演奏にも使われている。上空から見ると4枚のシェルの接点がトップライトになっており、巨大な十字架に見える。



永青文庫

目白通りに出て講談社野間記念館を通り過ぎ、左に折れて路地を進む。神田川に下る胸突坂と言われる急坂だが、坂の手前が細川家の屋敷跡だ。細川家は室町幕府の管領の家柄で、明智光秀とも親交が深かった藤高を初代とする。その縁で2代忠興は光秀の姫を妻とした。キリスト信者ガラシャがその人である。忠興は千利休の門弟でもあり、三斎と号して芸術の愛好家であった。3代忠利の時に肥後熊本54万石の太守となる。

細川家の当主は代々文化財への造詣が深く、昭和25年に初代藤高に由来する「永」「青」の名をとって細川家700年にわたる収蔵品の博物館とした。規模はRC3階建てでこじんまりとした造りだが、質実な空気に満ちている。設計者は吉田五十八の弟子で、両国国技館・京都南座などを手掛けた今里隆。敷地内にある別館での喫茶がまたよい。現在18代の当主は元首相の護熙氏で自ら書や工芸の名手でもある。



印刷博物館

神田川沿いに飯田橋方面に向かうと大曲。その手前に半円形の平面を持つ高層ビルが凸版印刷の本社。そのBF～1Fが印刷博物館になっている。館内の説明を受けるために予約をしておいた。印刷の過去・現在・未来を伝えるために、感じる・見つける・わかる・作る、をテーマに展示を繰り広げ、3D印刷の実演も行っている。紀元前からの文明を伝える原点としての印刷を、わかりやすく解説してくれるのはありがたい。大日本印刷と並ぶ日本を支える印刷技術の底力を見る思いだ。

古代の金文や木版（経本や浮世絵などもそうだ）活版などハンコの原理で印刷する時代を経て、平版、オフセット印刷から現在のICカードの印刷まで、その先はどうか興味は尽きない。



印刷の目的は、同じものをたくさんプリントして流布することにある。ところでどこにプリントするのか。古代人はそこに苦勞した。記録を保存するために、エジプトではパピルス、シュメールでは粘土板、中東の旧約聖書では羊皮紙などが使われた。しかしいずれも、すだれ状で柔軟性がない、重くて

もろい、高価で手が出ないなど、汎用性がなかった。そうした中で、AD105年に中国で後漢の時代に宦官の蔡倫が「紙」を発明する。それまで竹簡・木簡に筆で書いていたものが、薄い

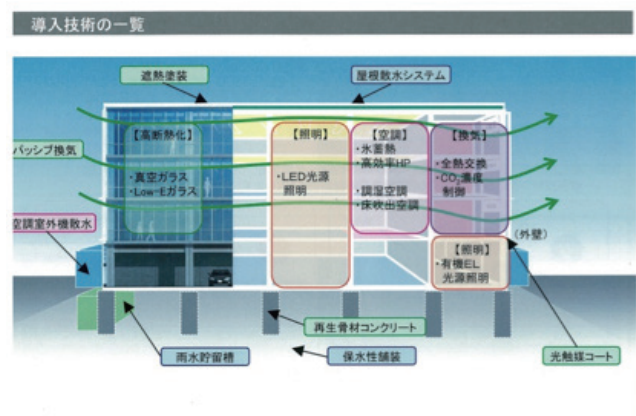
紙に書ける、版木で容易に印刷ができる。中国ではこれを契機に一挙に文明が広がった。これがイスラム圏に伝達されたのは、AD700年ごろイスラムが唐とのタラスの戦いで勝利し、多くの捕虜をとらえた中に紙すき職人がいたことによる。ムスリムは狂喜した。イスラム教の伝播に光明が差したからだ。757年に紙工房ができ、サマルカンド紙と呼んで珍重した。彼らは紙の製造方法を門外不出としたため、ヨーロッパキリスト教社会に紙が伝わったのは12世紀半ばになる。これが原因でヨーロッパは圧倒的に文化が遅れたのだ。印刷の力はそれほど人類に影響を及ぼした。

五洋建設本社ビル別館



中央ゼネコンの一つ五洋建設は、地球上の5つの大洋に雄飛する土木・建築会社からその名がある。本社敷地内に、最新技術を駆使して建設された新館に関して担当者の皆さんから説明を受けて現地見学を行う。

RC+Sの組み合わせによるハイブリッド構造（全体フレームはRCで構成するのだが、梁の中央部を単純梁Sで剛接合とす



ことで、梁背を圧縮できる。階高の節減や天井ふところの設備配管を容易にする狙い)、再生骨材の利用、高断熱・省エネを考慮した照明・空調、光触媒によるメンテナンスフリーのクリーニングなど、随所に地球にやさしい環境づくりを工夫した技術は、実に応用範囲が広いと関心しきりであった。また環境エネルギーモニタリングシステムを導入し、エネルギーの使用量をグラフ表示でビジュアル化している。自分たちが使っている熱量の負荷を減らさなければ、との意識の啓蒙を行っているのだ。